



様々な大きさ、重さに対応する同社の「シュリンク付き台紙」。奥に見えるのは「インモールド転写箔」でグラデーションなどの印刷が施された携帯電話のカバー。

“エコ”の組み合わせで 独自性ある製品を展開。

紙ではなくフィルムへの印刷を専門とする株式会社トービ。熱を加えることで収縮して製品に密着する「シュリンクフィルム」を業界でもいち早く導入し、先進的な技術を次々に開発してきた。そんな同社は、環境に対する意識が年々高まるなか、徹底的にエコに配慮した製品開発に取り組み、付加価値づくりに成功している。

【株式会社トービ】
<http://www.tobinet.co.jp>

「もったいない」が生んだ エコな台紙。

「エコは、私たちが生き残るための重要なキーワードです」
そう力強く話すのは株式会社トービ代表取締役の寺谷一紀氏。

多品種小ロットのフィルム印刷を強みとする同社は、エコに徹底してこだわったラベルやパッケージ用フィルムを開発し、メーカーの注目を集めている。小売店の店頭でよく目にする吊り下げタイプの陳列棚。プラスチックやリップクリームなどの化粧品から、電気コードなどの小物など、様々な種類、大きさの製品がぶら下がる。そのパッケージの大半が、硬いプラスチックで製品全体を覆った「プラスチックスターパック」と呼ばれるものだ。商品保護できる反面、すぐに捨ててしまうため、資源的に無駄が多い。

同社はプラスチックパックに替わるエコな台紙として「シュリンク付き台紙」を20年以上前から提案し、生産してきた。これは、透明プラスチックカバーのかわりに、熱を加えると収縮する「シュリンクフィルム」を用いて中の商品と紙の台紙を密着させるパッケージで、一部は同社の特許だ。薄いフィルムを必要最低限の分量だけ使用しているため、プラスチックパックよりも石油資源の消費量が減ることに加え、コスト的にも割安となる。

同社がこれを開発するに至った理由は、一言でいえば「もったいない」の精神だった。今から約30年前、コンビニの普及などに伴い、吊り下げ式の陳列棚が急増していった。当時から主流だったのがプラスチックパック。シュリンクフィルムで高い技術力を誇っていた同社は、プラスチックケースですっぽり覆ってしまう包装が資源の

無駄だと感じたのだ。早速開発に取り掛かり、シュリンクフィルムと台紙の接着剤は何が良いのか、製品をどう封入するかなど、試行錯誤を繰り返した。そして化粧水などの重たいものでもパッケージできるシュリンク付き台紙が完成した。さらに近年では、原料もエコにこだわることでその付加価値をより高めようとしている。フィルムは、トウモロコシなど、植物由来の成分を原料としたバイオマスフィルム。台紙は、再生紙やサトウキビの搾りカスを。接着剤やインキなども、環境に優しいものに変更。そうすることで世界でも類を見ないほどエコな吊り下げ台紙の提供が可能となった。

エコな転写技術も自然 エネルギーでさらに差別化。

同社が得意としている技術のひとつに「インモールド転写

箔」がある。化粧品のコンパクトや携帯電話、スマートフォンのカバーへの印刷などにも用いており、世界規模で注目されているエコな技術だ。

これは、プラスチック製品を成形する際に、模様などを印刷した特殊なフィルムを成形機の中に送り込み、製品の成型と加飾（印刷）を同時に行う。塗装などに比べて、使用する石油資源の量ははるかに少なく、工程も省略できるので、CO₂の排出削減に貢献する。ただ、技術的なハードルが高く、コンマ1mmのズレや汚れを出さずにつくる会社は、現在同社を含め世界でも数社しかないという。

「原料と技術のエコは完成した。自社の独自性をさらに際立たせるために、会社全体でできることは他にないか。そう考えている時に知ったのが、風力などの自然エネルギーによって発電された電力を供給するPPS（特定規模電気事業者）でした」
この電力で工場を稼働できれば、原料や技術と合わせて2重、3重のエコとなり、一層の差別化がはかれる。製品の片隅に「このパッケージはバイオマスフィルムを用い、エコエネルギーによって稼働する工場で印刷されました」と記せば、消費者へのアピールにもつなが

る。2010年の年末頃から準備が進められ、2011年7月より大阪本社、京都工場のすべての電力が自然エネルギーでまかなわれている。



電力制御監視システム(左下)。紐付き蛍光灯(右)による節電と合わせて、前年比最大30%の削減が見込めるといふ。営業車(右下)には、「自然エネルギーでモノ作り。ECOなパッケージはトービ」のコピーが躍る。

その電力さえもセーブしようとして、今年から電力制御監視システムや個別にON・OFFが可能な紐付き蛍光灯を導入。その他営業車を順次ハイブリッド車に置き換えるなど、それほどまでに徹底してエコ活動を推進している。

「日本でものづくりを続けるためにも、安価な海外勢と共存するためにも、付加価値の高い製品をつくり続けていきたい」と意気込む。



「日本での製造技術と雇用を守るためにも、フィルム製品の海外輸出なども検討しています」と話す寺谷氏。



グラビア印刷機がずらりと並ぶ京都工場。電力はすべて自然エネルギーでまかなわれている。